

## 参考文献

- 小杉泰 2006 『現代イスラーム世界論』名古屋大学出版会。
- Davis, U. 2000. "Conceptions of Citizenship in the Middle East: State, Nations, and People," in Nils A. Butenschon et al. eds. *Citizenship and the State in the Middle East: Approaches and Applications*. New York: Syracuse University Press, pp. 49-69.
- Fox, J.W., Mourtada-Sabbah, N. and al-Mutawa, M. 2006. *Globalization and the Gulf*. London & New York: Routledge.
- Joyce, M. 2003. *Ruling Shaikhs and Her Majesty's Government 1960-1969*. London & Portland: Frank Cass.
- Longva, A.N. 2000. "Citizenship in the Gulf States: Conceptualization and Practice," in Nils A. Butenschon et al. eds. *Citizenship and the State in the Middle East: Approaches and Applications*. New York: Syracuse University Press, pp. 179-197.
- Ouis, P. 2002. "Islamization as a Strategy for Reconciliation between Modernity and Tradition: example from contemporary Arab Gulf states," *Islam and Christian-Muslim Relation* 13(3), pp. 315-334.
- Al Rasheed, M. ed. 2005. *Transnational Connections and the Arab Gulf*. London & New York: Routledge.
- Smith, S. C. 2004. *Britain's Revival and Fall in the Gulf: Kuwait, Bahrain, Qatar, and the Trucial States, 1950-71*, London: RoutledgeCurzon.

(堀抜 功二 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)

---

**Howard Federspiel. 2007. *Sultans, Shamans & Saints: Islam and Muslims in Southeast Asia*. Hawai'i: University of Hawai'i Press. pp. 297+xii**

東南アジアのイスラームは長期に渡り、中東地域に対置されることで、「周縁」と位置づけられてきた。アチェのムスリム山地民のガヨ社会を人類学的に考察した Bowen は、ヨーロッパやアメリカ出身の東南アジア研究者と、東南アジア出身の研究者の間の、イスラームをめぐる問題関心の相違を指摘する。すなわち、前者は宗教組織の政治的・社会的役割、現地社会の文化的特質やイスラームを包含する宗教観念、シャーマンによる治療行為、聖者廟参詣といった儀礼を主に対象としている。これに対して後者は教育制度、高名なウラマーの社会的役割や思想、法学、クルアーン解釈などを中心に研究をすすめる、という [Bowen 1995: 69-70]。西洋出身の研究者はイスラームの教義自体、というよりはむしろ、そうした教義が埋め込まれた地域社会というコンテクストにおけるイスラームの姿を描き出そうとする傾向にあると考えられる。他方、日本に目を転ざると、東南アジア研究におけるイスラーム研究は近年になりその足場を確立させつつあるが、長期に渡り二次的要素として扱われてきた傾向にある。

本書はオハイオ州立大学政治学部の教授を務める、Federspiel による著作である。著者はインドネシアにおける現代政治とイスラームとの関わりを専門にしており、その他インドネシアのイスラームに関する事典、植民地期下のイスラーム行政、現代のムスリム知識人、インドネシアにおけ

るクルアーン解釈書についての著作がある。本書は、題名にあるように、東南アジア・イスラームを対象としているが、特にマレー・インドネシア世界を中心とする。マレー・インドネシア世界に存在する、さまざまなコンポネントを時代区分に沿って語ることにより、その多様性と地域内の紐帯としてのイスラームのあり方を明らかにすることを試みた一冊である。以下、本書の構成を概観し、次いで各章の内容を説明する。

本書は4章から構成される。第1章では600年から1300年、次いで第2章では1300年から1800年、第3章で1800年から1945年、第4章で1945年から2000年までを扱っている。原著者はこの時代区分について便宜上最も適切な区分であると述べるにとどまり、この時代区分を選択した理由を述べていない。しかし、原著者の意図を推測すると、東南アジアへのイスラーム伝来を歴史的に考察するうえで、信憑性の高い資料が存在し始めるのが1300年以降であるからだろう。また、第3章で扱われる1800年から1945年は、ヨーロッパ列強諸国による植民地化が本格的に開始され勢いを増してから、第2次世界大戦下の日本占領期の終焉とともに高まった独立への気運が確認されるまでの時期である。そして、第4章で対象となっている1945年から2000年にかけては、独立の達成とともに誕生した国民国家とその急速な発展、およびその内部における政治的・社会的動態がめまぐるしい時期である。また、2001年の9.11以降、東南アジアにおけるイスラームの様相が一変したため、9.11以降の動向は本書の対象とするところではないと考えられる。各章ではこれらの時代区分に従い、イスラームにまつわる政治、社会、文化などの要素をさらに細分化し、記述を行なっている。例えば、王国(国家)の行政、ムスリム・コミュニティ内における儀礼祭祀、教育、現地の慣習とイスラームとの関連、文学、芸術、およびモスク建築などである。題名にあるようにスルタン、シャーマン、聖者に関する記述に大幅な紙面をさいているというわけではなく、これらに関する記述は乏しい。題名にこれらの3要素を冠した背景は測りかねる。

次に各章の内容をみていく。

第1章では、インド洋交易ルートの確立と、交易活動に携わる人びとの移動が描かれている。また、アデンやバスラなどの中東地域の港の興隆、およびインドと中国の歴史的背景が簡潔に記述されている。イスラームに関しては、イスラームの誕生から、世界宗教としてその姿を確立させるまでの過程に言及している。

第2章では、港での交易活動の活発化に伴った、港湾を中心とした港市国家が議論の中心となっている。多様な出身地の者が集う港市と、その周辺に成立した王国にイスラームの受容が加わり、多様性に富んだ発展がもたらされた様子を儀礼祭祀、王国の政治システムなどに言及しながら詳述している。

第3章では、植民地化に伴う王国の権威衰退、および植民地期下のイスラーム諸実践について述べられている。まず、イスラームに対する各植民地政府の反応は、シャリーアの扱いを中心に植民地政府ごとに記述され、互いの共通点、相違点が提示されている。次にイスラーム諸実践については、ハッジに関する記述が豊富であり、その他反植民地運動、イスラーム改革運動を担った中心的人物、およびその思想が描かれている。他方、日本占領下におけるイスラームに関する記述は少ないが、終戦後の独立運動を担う重要な機関、人びとの紹介がなされている。

第4章では、国民国家の形成とイスラームの担う新しい役割について論じられている。原著者はムスリムがマジョリティーを占める国家とマイノリティーである国家を区別し、それぞれの国家におけるイスラームの位置づけを行なっている。

このように本書は、東南アジア・イスラームにまつわるさまざまな要素を盛り込み、それぞれの

切り口から東南アジア・イスラームの包括的理解を目指した一冊である。

本書における原著者の意図は、東南アジア・イスラームの多様性と、地域内を結びつける紐帯であるイスラームのあり方の、通時的変容を提示することであった。政治、経済、社会、文化というコンテキスト内で、多岐にわたる要素の記述を行なうことにより、東南アジア・イスラームに内在する多様性は大いに明らかになった。しかし、紐帯という観点からみると、次の点が指摘されるだろう。まず、時代ごとに異なる紐帯の姿を描ききれていない点である。原著者は、東南アジア・イスラームの多様性を詳細に提示したものの、これらコンポーネントを個々に繋ぐ、紐帯に関する記述が乏しい。東南アジア地域内の紐帯としてのイスラームは、東南アジア域内にとどまらず、特に中東地域との地域間紐帯の相互関係のなかで理解することによって、よりその実態を明らかにすることができると考えられる。そのため、東南アジア地域内の紐帯を描くためには、中東地域とのネットワークに注目する必要がある。本稿では、上記の理由から評者の研究関心である「中東地域との知的ネットワーク」に重点をおいて、本書の年代区分に沿いながら、原著者の試みを検証する作業を行なう。

第1章で扱われた600年から1300年は、資料の不足により、この点についての具体的な記述はみられない。インド洋交易ルートの確立にともない、多くのムスリム商人が島嶼部各地の港湾で交易活動を行っており、港湾周辺には彼らの逗留地も建設されていた。しかし、このような逗留地コミュニティに、ウラマーやイスラーム教育施設が存在したか否かに関する記述は見あたらない。事実、島嶼部東南アジアにイスラームが爆発的に広まるのは、14世紀以降のことである。

第2章では、第1章と異なり、豊富な資料に基づいて多くの点が記述されている。16世紀以降スマトラ島の北端に位置するアチェが、イスラーム諸学を学ぶうえでの重要な地域となったこと。加えてハムザ・ファンサーリー\* (1590頃生 没年不詳) やシャムスディーン・サマトラーニー (1630没) によるイブン・アラビーの存在一性論の普及、そしてヌールディーン・ラーニーリーと、アブドゥル・ラウフ・シンケルによる、存在一性論への批判が行なわれたこと、以上の3点が述べられた。また18世紀以降に学問の中心地が西スマトラに移行したことをあわせ、18世紀を代表するウラマーについての紹介がなされている。小結として原著者は、この時代、逸脱した教義を是正し、それぞれの主張する正しいイスラームへ導こうとするウラマーの姿勢が顕著であった点と、当時マドラサやプサントレンで使用されていたキターブ\*\*は中東地域からの輸入であり、マレー・インドネシア世界のウラマーによる著作はこのようなキターブの模倣でしかなかった、という2点を提示した。

本章における原著者の見解について、ここでは以下の3点を指摘したい。まず、ウラマーに関する記述に相関性がみられず、あたかも個々のウラマーが単独で教えを広めていったかのように描写されていること。次に1点目に関連して、本書の目的である紐帯を論じるうえで重要な、タリーカの存在が無視されている点。最後に、小結で述べられたような模倣としてのキターブは存在するが、マレー・インドネシア世界のウラマーの著作が中東地域にも影響を与えた事実が欠落している点である。以下、3点をそれぞれ詳しくみていく。

第1点目と2点目に関して、ウラマーの簡潔な出自と相互関係、およびタリーカへの参加に具体的に言及する。ハムザ・ファンサーリーはアチェ出身の学者であり、マッカ、マディーナへの遊

\* 以下、人名は全て大塚和夫・小杉泰ほか(編)2002『岩波イスラーム辞典』に拠る。辞典に記載のない人名に関しては原則としてアラビア語の発音に近い音で表記した。

\*\* アラビア語でキターブ (*kitāb*) は幅広い意味での書物を指すが、マレー・インドネシア世界におけるキターブは、宗教書という意味も含まれる。

学中にカーディリー教団のイニシエーションを受けた。アチェに帰郷後は、カーディリー教団の教えとイブン・アラビーの存在一性論の普及に努めた。シャムスディーン・サマトラーニーはファンズリーと師弟関係にあり、ファンズリーの死後はサマトラーニーによって教えが広められた。次のラーニーリー(生没年不詳)は、インドのラニール出身の学者であり、インド洋海域ルートを広く遊学していた伯父の影響でアチェに渡来した。当時王国ではサマトラーニーがシャイフ・アル・イスラームを務めていたが、彼の死後すぐに、次代のスルタンより後継に指名される。ラーニーリーはファンズリーやサマトラーニーの説いた存在一性論を厳しく批判、弾圧し、これを支持する者は異端者であり、処刑するという旨のファトワーを出したことでも有名である。同時にラーニーリーはリファーイー教団、アイダルスィー教団、カーディリー教団といった複数のタリーカに所属していた。その後宮廷内のシャイフ・アル・イスラーム位をめぐる論争に敗れてインドへ戻るまで、約7年間アチェに滞在した(1637-1644)。最後のシンケルはアチェ近郊に誕生した(1615頃)。一説によると、少年期に晩年のサマトラーニーに学んでいたようである[Azra 2004: 70-71]。後に中東地域へ渡り各地を遊学したのち、マッカ、マディーナに19年程度滞在中はアフマド・クシャーシーと、その後継者であるイブラーヒム・クーラーニーの元で学んだ。シンケルはクシャーシーにより、シャッターリー教団とカーディリー教団のハリーフアとして指名され、アチェに帰郷後はこれらのタリーカの教えを広めた。

また、本書では言及されていないが、ムハンマド・ユースフ・マカッサリーに言及する必要があるだろう。マカッサリーはスラウェシに生まれ(1627頃)、その後ラーニーリーに師事するためにアチェへ渡るが、ラーニーリーは同年に帰郷していたため、グジャラートへ渡った。次いでイエメン、マッカ、マディーナ、ダマスカスを遊学している。遊学中にカーディリー教団、シャッターリー教団、リファーイー教団から、マッカではタージュッディーン・ヒンディーからナクシュバンディー教団のイニシエーションを受け、帰郷後はオランダ植民地政府に対する戦争に先陣をきって参加した。オランダ政府に拘束されスリランカへの流刑に処されるが、商人や巡礼者のネットワークを利用してマレー・インドネシア世界への発信を絶えず行なっていたために、さらに遠方の南アフリカに送られ、同地で逝去した。その他、18世紀に活躍したウラマーである、アブドウル・サマド・パリンバーニーは、現在のパレンバン地方に生を受け、青年期にマッカ、マディーナへ渡る。その後故郷に戻ることはなく、現地のマレー・インドネシア世界からの留学生コミュニティで学んだ。現地ではサンマーニーよりスーフィズムを学び、サンマーニー教団のイニシエーションを受けた。マッカで留学生を対象にイスラーム諸学を教えるようになった際にも、サンマーニー教団の教えを伝え、帰郷した弟子によってサンマーニー教団はパレンバン地方に広まることとなった。

第3点目に関して、これらの著名なウラマーは多くの著作を残しており、大半がマレー語、アラビア語のどちらかで記された。原著者が14世紀から19世紀までのマレー・インドネシア世界におけるキターブは全て中東地域の模倣であると小結で述べたことは上述の通りである。しかし、当時から幾人かの東南アジア出身ウラマーによる著作は中東地域にも普及していた。端的な例として、シンケルのクルアーン解釈書である *Tarjumān al-Mustafid* はマレー・インドネシア世界だけではなく、中東地域でも長期に渡って読みつがれており、イスタンブルで1884年に出版され、その後カイロやマッカでも出版された[Azra 2004: 80-82]。

以上のように、1300年から1800年までの東南アジア・イスラームにおける学問領域では、東南アジア域内におけるウラマー相互の連帯のみならず、インド洋交易ルートを通じた中東地域との人的、知的交流が活発に行なわれていた。また、キターブやウラマーの移動に着目すると、マカッサ

リーは南アフリカへの流刑後、現地にタリーカを伝え、墓は現在も参詣の対象となっている。このことから、マレー・インドネシア世界における、タリーカや書物を通じたインテレクチュアルな側面は、必ずしも「中心」の模倣に終始したわけではなく、「周縁」からの発信があったことも明らかとなるだろう。

転じて、1800年から1945年にかけては、植民地統治の本格的な開始にともない、教育システムにも大きな変容がみられた時期であった。原著者は第3章で、マドラサやプサントレン（寄宿制の宗教学校）などの教育施設の大幅な増加、およびその生徒数の推移を述べている。また、植民地地下における新教育制度の導入と、著名なウラマーの人とをりを紹介している。植民地期のイスラーム教育を扱った節の終わりで原著者は、マドラサやプサントレンといった伝統的なイスラーム教育施設の増加は、植民地政府の課した新教育システムに対する、ムスリム側からの反発の結果であると結論づけた。加えて、前章と同じく、ウラマーによる著作活動がムスリムの知的欲求を満たした事実には変わりはないが、大半が中東地域で出版されたアラビア語書物に依拠していることを指摘した。そして、これら書物の活用に大幅な刷新はなく、依然として重度の模倣が行われていた点を述べている。

しかし本章でも、知的ネットワーク、および東南アジアと中東地域との繋がりという2点に関する原著者の言及は曖昧であった。また、植民地統治期の教育制度の変容を宗主国による植民地行政という別の節に組み込んでしまったために、教育制度の全体的な理解が困難となったと考えられる。以下、上記の2つの問題点を明らかにし、議論を進める。

まず、知的ネットワークに関して、ネットワークに参加する留学生と、代表的なウラマーについて考察する。17世紀頃からマッカ、マディーナではマレー・インドネシア世界からの留学生によるコミュニティが存在したことが報告されているが、その数はごく少数であった [van Bruinessen 1994: 9-10]。本章で対象とされた1800年以降、マレー・インドネシア世界から多くの学生がイスラームを修めるために、マッカ、マディーナを主とした中東地域へ赴くようになった。さらに、蒸気船の運航が開始されるとともにその数は増加の一途をたどり、カイロでは1919年時点で50人程度であったインドネシア人留学生が、1925年には250人にまで増加した [Abaza 1994: 54-55]。彼らの大半が、帰郷後は主要なプサントレンにおけるキヤイ（宗教教師）として、あるいは、他に職をもちながら宗教指導者として活躍した。この時期の著名なウラマーとしてナワウィー・バンテン（1814生）があげられる。ナワウィーは青年期よりマッカに渡り、イスラーム諸学を修めた後現地にとどまり、40年以上に渡って留学生を教えた [Johns 1995: 180]。20世紀では、カイロ大学で学位を取得したムハンマド・ラシーディー（1915年生）が一例としてあげられる。ラシーディーは大学での勉学以外に、ムスリム同胞団の代表的なイデオログであったサイイド・クトゥブとの親交があり、彼から個人的な指導を受けていた。また、戦後のインドネシア政治における重要なアクターの多くが中東留学の経験者であり、留学中にはさまざまな政治活動に参加した経歴をもつ [Abaza 1994: 76-80]。

次に中東地域との連帯で注目に値するのは、19世紀後半から20世紀前半にかけて、マレー・インドネシア世界で興ったイスラーム改革運動である。エジプトのムハンマド・アブドゥウやラシード・リダーを中心として発展した改革運動は、エジプトで学ぶ留学生のみならず、中東地域で学ぶ多くの学生に影響を与えた。改革思想の媒体であった『アル・マナール』に影響され、マレー・インドネシア世界でも『アル・イマーム』、『アル・ムニール』といった雑誌が発行され、改革思想の風を吹き込んだ。また、教育機会の伸張に対する要求が高まり、多くの学校が各地に建設された。

1912年に設立されたムハマディヤは、オランダ植民地政府の許可を得て活動を開始し、西洋近代的な教育を推進し、同時に正統なイスラーム教義の普及に努めた。他方1926年に設立されたナフダトゥール・ウラマはマドラサ形式による伝統的なイスラーム教育を推進していたが、後には教育システムの改革を行い、普通教育を導入した。

このように、1800年から1945年にかけてのウラマーとイスラーム教育をめぐるコンポネントは、中東地域との繋がりというネットワーク的性質を維持しながらも、前章の扱う時代とは異なる様相を呈している。それは中東地域におけるイスラーム改革運動の移入、日本軍による占領、ナショナリズムの萌芽といったさまざまな要因を包含するイスラームの姿であった。この時期においても中東地域とのイスラームを通じた紐帯は維持され、思想、文化などのさまざまな面で、マレー・インドネシア世界は刺激を受けた。しかし、この時代は知的ネットワーク上におけるマレー・インドネシア世界からの発信は顕現しておらず、中東地域からの一方的な受動的姿勢がみうけられる。

最後の第4章は終戦後の1945年から2000年までを扱っている。東南アジア諸国はこの時期に次々と独立を果たし、それぞれの発展の道を歩んでいくこととなった。原著者は本章において、主に現代インドネシアのイスラーム教育の場で教えられている科目別の割合を述べた上で、公立学校で一般科目を学ぶ学生と、伝統的なプサントレンでイスラーム諸学に重点をおいて学ぶ学生たちの間の社会に対する見解に相違がみられることを指摘している。また、この時期の著名なウラマーと彼らのクルアーン解釈書を引き合いに出し、その内容や傾向を紹介している。

ここで指摘できるのは以下の2点である。第1に、本章では前章で触れられた植民地教育システムから、現在の教育制度への変遷が述べられていない点。第2に、現代のマレー・インドネシア世界と中東地域とのネットワークに言及されていない点である。以下、第1点にかんして、現在のインドネシアにおけるイスラーム教育制度とマドラサやプサントレンといった伝統的イスラーム教育施設の変容を追う。次に、第2点目に関連して、中東地域との現代の知的ネットワークを考察する。

はじめに、インドネシアにおける教育制度は現在、国家教育省 (Departmen Pendidikan Nasional) と宗教省 (Departmen Agama) が管轄する2つの集団に分かれており (スコラとマドラサ)、さらにそれぞれフォーマル教育、ノン・フォーマル教育に区分されている。1970年代から幾度かの教育法改正を経て、現在マドラサは宗教教育に特化しない、「イスラームの性格をもつ一般学校」として1989年制定の国家教育制度法 (Undang-Undang Sistem Pendidikan Nasional) のなかに位置づけられていくようになった [服部 2007: 5-13]。また、インドネシアには依然として多くのプサントレンも存在する。プサントレンでは法学、神学、クルアーンなどが教えられている。プサントレンに通う生徒はサントリといい、キヤイとサントリの師弟関係は強固である。近年、伝統的プサントレンにも変容がみられ、なかには一般学校 (マドラサ) を包摂するものや都市型プサントレン (夕方まではプサントレン外の一般学校で学び、夕方以降プサントレンに戻りイスラーム諸学を学ぶ) が出現しているという [西野 2007: 46-50, 121-125]。

次に中東地域との知的ネットワークに着目する。16世紀以降、マレー・インドネシア世界から中東地域へ留学する者が増加した旨は第3章に関する記述のなかで触れた。この時代も同様に、留学生の数は年々増加している。マレーシアにおける国際イスラーム大学 (International Islamic University) の設立、インドネシアにおける国立イスラーム宗教大学 (Institut Agama Islam Negeri) の設立に伴い、帰国後はこのような教育機関に所属して教える者がいる他、プサントレンやポンドック (マレーシアにおけるプサントレンの呼称) で教師を務める者や、宗教省に官僚として入省する者もいる。また、現在ではインドネシア国内におけるエリート・プサントレンの存在も指摘されて

いる。これらのプサントレンでは、キヤイが中東地域の大学の有力者との間に個人的で密接な関係を構築しており、公式な協定ではないが、毎年一定数のサントリたちが、それぞれの大学へ入学できるシステムになっている。これにより、中東地域におけるプサントレン周辺の村落コミュニティの再生産が起きているという事例も確認されている [Abaza 1994: 115-120]。

以上のように、1945年から2000年にかけてのマレー・インドネシア世界における様相は先代の遺産を受け継ぎつつも、さらに多様化した姿をみせている。教育の制度化、および社会変化にうまく適応した伝統が確認される。同時に、中東地域との知的ネットワークは留学生数の増加に伴い、さらに強固なものとなり、教育、書物、施設設備などさまざまな側面でその姿を顕著にしている。

このように見てくると、東南アジア・イスラームをイスラームを通して理解するためには、地域内紐帯としてのみならず、中東地域との地域間紐帯としてのイスラームを視野に入れることの重要性が感得されるだろう。

本書はマレー・インドネシア世界におけるイスラームが、どのように伝来し、人びとの生活に根ざすようになっていったのかを歴史軸にそって記述した一冊であった。ここで原著者が示そうと意図したのは、上述の通り東南アジア・イスラームの多様性と、地域内紐帯としてのイスラームの2点であった。このうち第1点については、東南アジア・イスラームに内在する多様性を多岐に渡る要素を読者を魅了する特色のある記述をもって、網羅的に提示することに成功している。他方、第2点については物足りなさが残る。本稿は、東南アジア地域内における紐帯としてのイスラームを描くという、原著者のもう1つの試みをウラマーと教育制度に注目し、具体的事例を加えて検証することによって、中東地域との地域間紐帯をも含む、より広範な紐帯として提示することを試みた。しかし、本書が東南アジア・イスラームの包括的な理解を可能とさせる概説書性格を有していることは言うまでもなく、これから東南アジア・イスラームを学ばんとする者にとって最初に手にとるに値する、貴重な一冊というべきであろう。

## 参考文献

- 今永清二 1992 『東方のイスラーム』 風響社。
- 西野節男 2007 「ポンドック・プサントレンの現状と改革」 西野節男 服部美奈 (編) 『変貌するインドネシア・イスラーム教育』 東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター, pp. 35-61.
- 2007 「スマランの都市対応型ポンドック・プサントレン・アッダイヌリヤル 2 コース (下宿) のプサントレン化とその学習活動」 pp. 121-140.
- 服部美奈 2007 「曖昧化する境界—マドラサの制度化とプサントレンの多様化」 西野節男 服部美奈 (編) 『変貌するインドネシア・イスラーム教育』 東洋大学アジア文化研究所・アジア地域研究センター, pp. 3-34.
- 弘末雅士 2004 『東南アジアの建国神話』 山川出版。
- 湯川武 1990 「ウラマー遊学の世界」 『歴史のなかの地域』 岩波書店, pp. 225-308.
- Abaza, M. 1994. *Indonesian Students in Cairo: Islamic Education Perception and Exchanges*. Paris: Association Archipel.
- Azra, A. 2004. *The Origins of Islamic Reformism in Southeast Asia: Networks of Malays-Indonesian and Middle Eastern 'Ulamā' in the Seventeenth and Eighteen Centuries*. Honolulu: University of Hawai'i Press.

- Bowen, J.R. 1995. "Western Studies of Southeast Asian Islam: Problem of Theory and Practice," *Studia Islamika* 2 (4), pp .69-86.
- Johns, A. 1995. "Sufism in Southeast Asia: Reflection and Reconsiderations," *Journal of Southeast Asian Studies* 26 (1), pp. 169-183.
- van Bruinessen, M. 1994. "The Origins and Development of Sufi Orders (*Tarekat*) in Southeast Asia," *Studia Islamika* 1 (1), pp. 1-22.

(木下 博子 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科)